
bond of flame ~炎の絆~

緋村 螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

bond of flame(炎の絆)

【Zコード】

Z7045A

【作者名】

緋村 螢

【あらすじ】

火炎瑞稀・神良聖純・雷夢出雲の日常をまず。絡み合った友情の物語。旅に出る準備段階の物語。時には愛の物語。

第一章 理由（前書き）

長くなつたのですが、第一部ではまだ旅にはでません。では、
one of flame』第一章「理由」お楽しみ下さい。

■ b

第一章 理由

第一章～ 理由 ～

いつも、平和なこの村の端に赤い屋根の2階建ての家があった。

その家には、ある伝説の本を持つ者、

火を司る神とされる瑞稀

水を司る神とされる聖純

雷を司る神とされる出雲

その、三人が住んでいるのだ。

本人等は本は持っているが、神だということは知らないらしい。

説明はこれくらいにして、

・・・なにせり、今日は寝がしこ。

聖純「瑞稀一起きてへだよ。」

瑞稀「ん～？朝かあ～？・・・もつじへへりこ寝かせりよ。」

聖純「朝食当番、瑞稀ですか？」

瑞稀「ゲッ・・・・何作れつて？」

聖純「それは瑞稀にお任せします。」

出雲「飯まだ～？おなかすいたー。」

瑞稀「…ダ～、もう！作れば良いんだるーーー！その代わり、文句言つなよ。」

調理中

俺等・・・神良しんら・聖純せいじゅん・雷夢らいむ 出雲いずも

そして、俺、火炎かえん 瑞稀みずきは同居どうきょしています。

まあ一応女の俺が何故こんな奴等と一緒にいるかと言つと、互いを信頼しているのが一つ。
もう一つあるんだけビ、もつりつは・・・

瑞稀「完成～！」（トースト一枚、りんご・・・以上…）

出雲「パク・パク……」（口に入れば何でも食い）

聖純「普通に食べれますけど……少ないですよ。」

瑞稀「文句言つなつてばー！」

伝説と、約束だ！！

伝説には・・・

『この世にまだ伝説の本が四つある。』

それは、水の本、火の本、雷の本、風の本。

この中の水・火・雷が揃い心が一つになれば道が開く。』

つてな。だから、約束したんだ。

もう、「死ぬ……」と言った俺等だけど一緒に頑張りましょう。』

瑞稀「朝食終了……。さてあの伝説の続きを読もうかな～。」

出雲「もつ、本揃つてんでしょ。」

瑞稀「え？あ、ああ。伝説の中の風の本つてのが気になるけどこれ

から調べる。

それに…つーか、何も起こらないのは気持ちが揃つてないんじゃないの？」

聖純「旅・・・ですか。」

瑞稀「良いけど、無計画?」

出雲一そー。その方が心が1つに！！」

聖純

瑞稀「…」

「え? ホント?」=イ! ジ=イ=

聖純一
み・
瑞稀まで
仕方ありませんね
行きましょうか
旅

「ワーィ！ あ～行こう！」

瑞&豔「「おー（あー）……ちよつと待てよ（待つだけだよ）」

聖純「せめて一週間後で・・・。」

瑞稀「モーニング」

出雲「・・・・・ハイ。」

つて事で、半強制的に旅に出る事になったのだった。

第一章 理由（後書き）

第一部もどうのくらこになるかは分かりませんが。付き合つてください。

第一章 仲間（前書き）

こつものさわな瑞稀・聖純・出雲に波乱な仲間が？！

第二章 仲間

第一章) 仲間)

瑞稀「さあ、色々邪魔されたけど伝説の続きを・・・

『水・火・雷の本を持つ三人が出会い丁度百日目、

風の本を持った人物が訪れる。

そしたら、強制的に仲間になるだらう・・・』

え?・・・なあ、聖純。俺らが会ったのついでだけ?』

聖純「えーと、ですね・・・一月二十四日ですね。それがどうかしました?」

瑞稀「今日が・・五月二日・・・・・・丁度・・・・・・百日目・・・」

出雲「ニ・・・・・・」

聖純「そうですね。・・・何か祝います?」

瑞稀「・・・・・・。」

ピーンポーン

出雲「ん?どうぼー?」

聖純「それでは、インターほんは鳴らさないでしょ。」

テクテクテク・・・・

ガラッ！

？？「お前らか？伝説の本持ってるの。」

出雲「え？何で分かつ（モガー）」（聖純に口を押さえられる）

？？「オレは、お前らと同じように風の本を持つてる。」

聖純「風の本？…ビ、どうこう」とですか！？瑞稀！』

瑞稀「ん~、今日は、俺らが会つて丁度百田日。

伝説には、今日、風の本を持った人が現れるって書いてある
んだ。』

？？「よく知つてんじゃねーか、チビ共のくせに。』

三人「「「三人のチビチビ言つた攻撃ーーー。」」」

シャキーン

三人「「「・・・刀ーーー。」」」

攻撃途中で止まる。

？？「ハハハ！良く出来た小僧共だぜ！

つで、オレを仲間にすんのか？しないのか？」

聖純「なんなんですか？いきなり。」

出雲「そりだー もうだー！」

? ? 「伝説を読んだのは一人だけのようだな。
んじゃー そこの小僧、答えるよ。」

瑞稀「さっきから・・・ 小僧小僧うつうつさいんだよーーーー。
俺は女だ！お前だつて同じくらじの年だろーーーー。」

出雲「え？・・・・・・ もうだっけ？」

ゴチン！

出雲「痛いよー。聖純。瑞稀が殴つたー！」

聖純「今日は仕方ありませんね。」

? ? 「オレを無視するなよ・・・・・まあ前文はオレも悪いから良いく
とじでびすすんだ？」

瑞稀「びづするー（つても）強制的に仲間になる』って書いてあつ
たけどね。」

出雲「アイ ルー！」

ゴチーン！ ガギーン！

出雲「一人共闘いよー。ひょっとふざけただけなの。」

瑞稀「で、どうすんだ？」

聖純「瑞稀は？どう思ってます？」

瑞稀「俺に決定権はないけど、『強制的に仲間になる』って書いてあつたからなあ。」

聖純「…やうなんですか。では、出雲は？」

出雲「どうでも良いや…・・・・・（イジケ。）」

聖純「じゃあ決まりですね。」

出雲「どうにつけ?..?.

瑞稀「仲間にする事にまとまつたよ。」

? ? 「 そ う か 、 分 か つ た 。 オ レ の 名 前 は 風 牙 ふうが 空 龍 くうりゅう だ 。

年 は 十 三 才 で 、 と り あ え ず 今 か ら 仲 間 だ 。 」

出雲「仲間があ～。」

瑞稀「・・・良い響きだな…。（行こひせー仲間達…。）

第一章 仲間（後書き）

できたら感想も「記入宜しくお願ひ申し上げます。

第三章 武器確定

第三章 武器確定

本……それは、自分達のが探す道。

その本が4つ全て揃った。

空龍「そういえば、オレしか血口紹介してないけど……」

聖純「あっ、そうでしたね。神良聖純です。一応男で、12歳。水の本を持っています。」

出雲「雷夢出雲、あと27日で13才。男だよ。えへと、雷の本を持つてるよ。」

瑞稀「火炎瑞稀！・・・12歳。・・・・・女。火の本を持つてゐる
「...」

聖純「空龍さんは何月生まれですか？因みに僕は6月で21日です。

「

空龍「オレは4月2日。お前らは？」

瑞稀「俺は7月24日。・・・・・。結局俺が一番下かよ。」

瑞稀落ち込む

出雲「そうだね。ボクは5月29日。」

瑞稀「空龍は何で刀持つてるんだ？」

空龍「武器だよ、武器。お前ら持つてないの？」

聖純「持つてませんよ。せっぱり武器について考えまじつか。」

瑞稀「剣・・・くれ。」

空龍「オレが持つてんのは刀！！！」

瑞稀「俺は剣が良い！-3刀流～。」

出雲「えーとボクは・・・」

空龍「剣は無理だな。それなら自分で買え。」

出雲「えーと・・・」

瑞稀「え？・・・・何で？」

出雲「え～～・・・・。」

空龍「オレは、刀しか作れねえ。」

出雲一
• • • • • • • • • • • •

聖純一 どうしたんですか？」

出雲一たてでみんなで無視するんたあ！！！」

出雲江

瑞稀・え？ わお！ 「めん！！ 出雲ア！」

小説

出雲「フツクで向だよー!!」

空龍一
いやあ、大の男が泣くかなあつて

空龍笑う

出雲「うつ・・・・泣いてない。」

出雲泣き止む

聖純「…………。さて、本題に戻りますか。」

瑞&出&空「…………本題つて……何んだ? (何?)」「」

ガイーン! ゴチーン! バシーン!

瑞稀「つて! 痛でーよ。ガイーンつて……」

出雲「聖純がゴチーンつて……ゴチーンつて……」

空龍「てーな。本題つて何だつて聞いただけだろ!」

聖純「…………まあ、武器の話に戻りましょ。」

瑞稀「あいよ。じゃあそれぞれ武器をどうするかってか?」

聖純「そつです。空龍は刀だそつなので、出雲ー。」

出雲「えつーえーと……鎌!—!」

瑞稀「へえー。俺は刀。」

空龍「あれ? 変えたのか?」

瑞稀「金に余裕ねえからな。2人分(聖純&出雲)買つただけでも
金ねえだろうし。」

空龍作つてくれよ!」

空龍「……何本だ？」

瑞稀「3本！んま、頑張れやー。」

空龍「おー……てめえも作れよ。」

瑞稀「聖純は？」

聖純「えつ？ ああ白魔法なので買つ必要ないですよ。」

瑞稀「へえー。じゃあ出雲の武器、一緒に買つてやつてよ。俺は準備してる。」

出雲「何の？」

瑞稀「おー。出雲、旅行くつて最初に言つたの誰だ？」

聖純「瑞稀！お金お金！」

瑞稀「良い物買つてほむる万円くらいか。あこよ。」

やつぱり瑞稀は通帳を差し出す。

聖純「あれ？ 通帳あつたんですか？」

瑞稀「ああ、俺のお年玉貯めたやつだ、1000万円くらうだな。あと、軍で働いて稼いだ金もあるぞ。もう一つの通帳。」

聖純「ええーそんなに？」

空龍「まめな奴だな。」

瑞稀「まづ、50万円だけ出して買いなー。買った後、残り出してきてよ。」

出雲「残りどうすんの?」

瑞稀「えつ？ああ旅費。足りなくなる確立充分だけどな。そんときは働く。良いだろ！」

聖純「…………まあいいんじゃないですか？」

出雲「働くのは誰？」

瑞稀「全員。」

聖純「行つてきます。」

出雲「…………では行つてきます。」

空龍「…………。」

瑞稀「いってらっしゃい。」

第三章 武器確定～（後書き）

読みにくくてすいません。
劇風な小説になっています。

ただ・・・情景が掘みにくいかも。
でも、でも！頑張ったんで！
コメントを！！

第四章 武器屋《楓封刃》

第四章) 武器屋《楓封刃》 一

聖純は出雲に引っ張りまわされていた。

聖純「こここの店で良いですか?」

出雲「嫌だ。違う店。」

テクテク・・・・

聖純「ここはビリですか?」

出雲「嫌だ。」

テクテクテク・・・・

聖純「ここは?ハアハアハア・・・。」

出雲「嫌だ。」

テクテク・・・タツタツタツタ(走る)

聖純「ここは?ハアハアハアハア。」

出雲「嫌だ。」

結構走らされて、流石に聖純も怒ったようだ。

聖純「（怒）……じゃあ何処が良いんですかー。」

出雲「…………武器や《楓封刃》」

聖純「あの、デパートの中にある？」

出雲「そいつ。この前良い鎌があった。」

聖純「あと一〇分くらい歩く事になりますね。」

出雲「そだね。」

聖純「まあ、自分が使いやすく、良いものなら仕方ないですね。」

テクテクテク・・・

10分後

歩いてたどり着いた場所はデパート。外壁が真っ白のデパートで10階まである。

ここには、色々なものが置いてあり、旅人には最適だ。

出雲「到着ー！」

聖純「流石に疲れますね。30分以上歩きましたよ。走りもしましたけど。」

出雲「じゃあ、行こー！」

聖純「ヨリです。エレベーターで上に。」

出雲は先にエレベーターではなく階段でダッシュして行つてしまつた。

聖純「出雲～？」

その頃、出雲は・・・

出雲「こひだよーせいじゅ・・・。聖純？聖純～？」（泣）
「たぐ、せ、聖純の奴、お、迷子になつてやの・・・」（泣）

一方、聖純は・・・

聖純「出雲～？困りましたね。・・・先に『楓封刃』に行つている
でしょ。」

『封楓刃』にて・・・

聖純「出雲？・・・先に銀行に行つてお金を下さりますか。」

冷静に判断しているが、やっぱり少し動搖していた。

それと正反対に出雲は、泣いていた。

出雲「ええ～ん、聖純～（泣）」

店員「どうしたんですか？」

出雲「あつ、せ、聖純が迷子なのー。」

店員「では、アナウンスしてみましょい。」

テクテク・・・

ピンポンパンポン

店員「迷子のお呼び出しを致します。

神良聖純様、神良聖純様、

雷夢出雲様がお探しです。至急、迷子お呼び出しセンターまでおいで下さい。」

5分後

聖純「あつー出雲ー。」

出雲「あー聖純!モグモグ・・・」

聖純「出雲?何を食べているんですか?」

出雲「お菓子ー。店員さんがくれたの。」

聖純「出雲(怒)行きますよ。」

出雲「・・・・はー。」

そのあと、銀行で金を下ろし《楓封印》へ。

出雲「やつとじ着いたー!」

聖純「出雲、どれですか？」

出雲「ええーっとねえ。・・・口・レー・」

聖純「いくらですか？」

出雲「51万円!!」

聖純「1万円オーバーですね。」

出雲「あつせう、でもー口レが良いーーー」

聖純「仕方ないですね。後の1万円は僕が出しましょ。」

出雲「わーい！わーい！」

店員「51万円です。」

聖純は下ろしてきた金と、自分の1万円を取り出し店員に渡す。

聖純「はー。」

店員「確かに預かりました。」

出雲「じゃ、聖純、帰ろー！」

聖純「はい。でもその前にお金を下ろしてから出ないと。」

出雲「疲れてるのにイー。」

聖純「そりですか、旅に行つて、飯も無し、水も無し、も無し……

最終的には宿にも泊まれず……が良いんですか、

出雲は。

出雲「それは嫌だ。銀行に行こ。」

そして、銀行に寄り、家に帰ろうとするのだった。

第五章 武器作り

第五章）武器作り

一方 瑞稀&空龍は

聖純・出雲を送った後、残された瑞稀と空龍が武器を作りしき
いた。

瑞稀「さてと、武器を作るか。」

空龍「…………」

瑞稀「無理なのか？」

空龍「いや、やれりつと選えども。出来るが……」

瑞稀「じめつして。」

空龍「まづ、やこの暖炉に火をつける。」

瑞稀「…………命令口調…………。」

空龍「ん？」

瑞稀「いや、何でもないです。」

瑞稀は徐にマッチを取り出す。

シユツ！ボウ・・・

空龍「んじゃあ、床に新聞を敷きつめろ。」

瑞稀「・・・はいはい。」

バサツ！ ドサツ！

空龍「次にこの台灯を暖炉の前に持つてけ。」

瑞稀「無理でしょ。こんなでかいの。」

空龍「持つてけ！」

瑞稀「面倒。」

空龍「もう一度言つ、持つてけ。」

瑞稀「面倒だから却下。」

シャキーン（空龍・刀）

キラーン（瑞稀・包丁）

お互い刀・包丁を取りだし、2・3秒静止。

空龍「・・・五分五分か。」

瑞稀「じやあ、頑張つてー。」

空龍「手伝えよ、一人じゃ持てるわけねえだろ。」

瑞稀「じゃあ、任せせるなよ。」

空龍「…………シク！」

瑞稀「分かったよ。運びます。手伝ってます。」

空龍「そつちもじ。」

ダンッ！

瑞稀「おいー落とすなよー床が傷つくな。」

空龍「はいはい。じゃあ始めるぞ。」

三十分後

瑞稀「うー、上手く作れん！」

空龍「知らねー。」

瑞稀「ああ、良いぜ。それで。自分で作ってやるー。」

空龍「…………。」

そして、また作り直し、

十分後

瑞稀「…………っしゃー！出来た！今まで最高の出来だ！刀一本！」

「！」

空龍「三本じゃなかつたのか？」

瑞稀「ああ、後一本は剣！」

空龍「つか！、おい、…………この材料じゃ刀しか作れないぞ？」

瑞稀「フツフツフツ…………。」

タツタツタ・・

瑞稀が倉庫に走って剣らしき物を持ってきた。

瑞稀「じゃーん！俺の元剣！だけど、もう使えねえ。真2つだ。
でも、コレで作れるだろ？」

空龍「しょうがねえな。オレが作つてやる。」

瑞稀「あ～れ～？刀しか作れないんじゃなかつたの？」

空龍「つるせえな。とにかく作る！剣は大変だから、貴様も手伝え

「！」

瑞稀「貴様・・だと？」

空龍「・・・他に何て呼べば良い。」

瑞稀「瑞稀で良いよ。それが、瑞稀様（笑）。」

空龍「じゃあ、瑞稀・・・で良い。」

空龍は少し顔を赤くさせた。

そして、空龍と瑞稀は剣を作り始めた。

空龍「完成！・・・今まで最高の出来だな。」

瑞稀「俺のセリフ・・・。」

空龍「お前・・・瑞稀の作った刀見せる。」

瑞稀の名前を言つた後やはり、顔を赤くする。

瑞稀「いちいち赤くなんなよ。・・これが？」

空龍「・・まあまあ・・だな。」

瑞稀「上出来だろ？」

空龍「・・・ああ。」

瑞稀「張り合いかないなあ。」

空龍「・・・張り合いかないっても初めてでここまで作れるのは凄いと思つけどな。」

瑞稀「やっほり？」

瑞稀は凄い笑顔で空龍を見る。

空龍「つ！／＼／＼ああ。・・瑞稀・・・一田ぼ・・」

少しいいマードだったがそのセリフを遮るものが・・・

第六章 瑞稀を求め？！

第六章 瑞稀を求め？！

ガチャ、タツタツタツタ

環科学

凶龍

空龍は何を言おうとしたか知らないが
やはり赤い

瑞穂

聖純 たたけ も」

出雲 - たたしまゝ！！

長編

空籠の赤みはい一の間にか消えていた

聖純「暑くないですか?」の部屋。

出雲一あく確かに

「稀少な文化財」

瑞稀はそう言つて、空龍の肩を叩く。

空龍「何でオレが！！」

瑞稀「さあ換氣～！換氣！」

校讎 · 批評 · 計論

瑞稀

怒龍

聖經 - 換氣終わりましたよ！」

出雲一終わった。」

瑞稀・・・・・笛ではめ?

空&田&聖 フフフ

瑞稀「さて、夕食の支度を。」

空體「おい・・・」

聖純「あつ瑞稀、お金です。丁度・・・」

卷之二

出雲「おなかすいたあ！」

空龍「おい！」

瑞&聖&出「「「てな訳で、空龍やつとこい（ぐだむこ）。」」」

空龍「おいーー！」

瑞稀「やつてくれないと飯食わせねーぞ！」

聖純「そうですと。新入りなんですから。」

空龍一 瑞稀は夕食作るからとがく
てめえらは手伝えよ！」

聖純「嫌ですねえ、この人は、初日から瑞稀を名前で呼んでますよ？」

出雲「ねえ。瑞稀は一応女の子なのに。」

瑞稀 一応かよ！」

空龍！瑞稀！お前の傑作（たんだ）！責任取れ！」

瑞稀・仕方なしな聖經適當は何か一々こといて

聖經 分かりました 出雲守佑でござる

瑞稀「僕のつて・・・聖純のものになつた覚えはない！」

冷静に叫んだ。

聖純「まあ冗談はおいといて・・・」

聖純は空龍に瑞稀には聞こえないよう耳打ちした。

空龍「つーーーーーーー！」

空龍を此処まで赤くする言葉はいつだ。

『瑞稀は空龍の事気にかけてますから今がチャンスですよ。でもチャンスは今日だけですけどね。僕も瑞稀のこと好きなんですね』

瑞稀「？」

聖純「では、片付け宜しくお願ひします。僕たちは買い物に行つて来るんで。」

一~三 時間くらいかかると思いますよ。（笑）

瑞稀「やけに長えな。」

聖純「空龍が新に仲間に加わりましたし。僕たちが出会つて一度百田ですからね。」

瑞稀「なるほど。」

聖純「では行つてきます。」

第六章 瑞稀を求め?ー（後書き）

第6話用です！・・・昨日は更新できなくてすいませんでした。
りづにまた覗いてつてください！

憲

第七章 思わぬ事故

第七章) 思わぬ事故

瑞稀「また二人かよ。」

空龍「さ、早く片付けるぞ。」

瑞稀「そうだな。」

片付け始めるか二人

二十分後

瑞稀「終わつた！』

空龍「……。」

瑞稀「どうした？顔赤いぞ？気分でも悪いのか？」

瑞稀は空龍の額に自分の額をつける。

空龍「なつ！／＼！」

空龍は思わず、瑞稀を突き飛ばす。

ガンッ！

瑞稀「つ！」

あらう事か、瑞稀は暖炉に思つてきりぶつかつてしまつたのだ。

そして、頭を打ちつけ、右手もぶつけてしまつたのだ。

空龍「あつ……悪イ……」

瑞稀「…………」

瑞稀からほ返事はなく、氣絶してゐるかのように思えた。

空龍「……生きてるか? もー……。」

空龍は凄こおどおどしてゐた。

死んでしまつたかと、思つてゐたようだ。

瑞稀「……（怒）。俺がんな簡単に死ぬかよー。つーか痛えじゃねえか！」

空龍「……生きてる。……ふう。」

瑞稀「ふうじやねえよー見ないこの血をーそして手をー。」

瑞稀の頭からは少しだが血が流れていた。

そして手は……動かないらしい。

空龍「つーー。」

空龍は瑞稀の手を引っ張つて外に出ようとする。

瑞稀「ど、何処に行くんだよー。」

空龍「病院だ！」

瑞稀「そこまでする必要ないって。」

空龍「・・・。」

空龍は瑞稀を背負つ。

瑞稀「なつ！／＼。」

空龍「動くな。」

瑞稀「・・・。」

空龍は瑞稀を背負い病院へ直行した。

今回は短かつたですね。さて、瑞稀はどうなるのかー！
これからbond of flame～炎の絆～もお願いします
！！

第八章 焼肉

第八章) 焼肉 (

瑞稀が怪我をしたことを知らない出雲と聖純はのんびり買い物をしていた。

出雲「今度はデパートには行かないんだね。」

聖純「デパートよりスーパーの方が安いですしね。」

出雲「今日の夕飯は何?」

聖純「豪勢に焼肉なんていかがでしよう?」

出雲「え? 焼肉? わーいわーい! ! !」

聖純「…今度は迷子にならないで下さいね。」

出雲「うつ・・・。」

そうして、二人は肉売り場に行く。

出雲「このお肉がいい。」

それは、ステーキ用の分厚いサーロインだった。

聖純「いや、ステーキじゃないんですから。」

出雲「これをお薄くきれば問題ないよ。」

聖純「そうですねえ。・・・では奮発しちゃいますか。」

出雲「やつたーーー！」

そうして、サーロインやらバラ肉やらカルビやら色々な肉を籠に入れた。

次は野菜売り場に行くようだ。

出雲一 ・・・ 野菜嫌い。

聖純「駄目ですよ、好き嫌いは。」

出雲「…さうと、みんなも嫌いだよ。」

聖純「皆とは誰ですか？瑞稀は野菜大好きですよ？」

僕も好きなわけではありませんが、食べますし。空龍も食べる思い
ますよ。」

出雲「そ、そつ。で、でもー今は野菜高こよーー。」

聖純「今日は奮発して豪勢にしますから大丈夫です。

しかももう少ししたらタイムセールで野菜の詰め放題で1袋500円ですから。」

出雲「そうね。じゃあ瑞稀に食べさせてもらおー」と。

聖純「抜け駆けは駄目ですよ。（笑・ブラック）」

出雲「・・・はい。」

聖純「そういえば、あの二人大丈夫でしょうか？」

出雲「平気なんじゃない？瑞稀、意外としつかりしてゐるし。」

聖純「そうですね。」

あと一分でタイムセールが始まります。準備をしてください。」

聖純「始まりますよー出雲ー準備ですー！」

出雲「はいー隊長！」

そうして、野菜の詰め放題が始まつた。

聖純「結構詰められましたね。」

出雲「そうだね。」

聖純「そろそろ三時間なんで、帰りますか。」

出雲「そうだね。」

そして、家に向かつのだつた。

聖純「ただいま。」

出雲「ただいま……あれ? 瑞稀? 空龍?」

聖純「いませんね。」

出雲「どうしてだろ?」

聖純は暖炉の方を見た。

聖純「血? ! 瑞稀のでしようか、病院に居るかもしれません!」

出雲「い、行こう!」

二人は帰ってきてそつそつ、病院に向かつ。

瑞稀の容態はどうなのだろうか。

第九章 診察

第九章) 診察 (

空龍は走つて病院に向かつっていた。

瑞稀「そんなに走るなよ！」

空龍「黙つてろ。」

瑞稀「・・・大丈夫なのに。」

そして、病院に着く。

空龍「医者は何処だ？」
「こいつが、瑞稀が怪我したんだ！」

空龍は病院に入るなりそう叫んだ。

瑞稀「馬鹿、病院だ静かにしろ！」

瑞稀も少し小さい声でそう叫んだ。

看護師「どうしましたか？！」

空龍「瑞稀が怪我したんだ！」

看護師「では、診察室へ！」

瑞稀「別に良いのに。」

そつして、三人は診察室へ。

そこには医者がいた。

医者「どうしたのかね若者よ。」

瑞稀「若者かよ！」

空龍「頭と、手を・・・！」

瑞稀「落ち着け、空龍。」

医者「何だ男か。」

医者は空龍を診てガツカリした。

瑞稀「いや、そいつが怪我してんじゃねえよ。」

医者「ああこっちか。こっちも男・・・つー頭・・・血が出ている
ではないか！」

空龍「あと、手が動かないらしい。どうにかしてくれー。」

瑞稀「落ち着けー！・・・俺男じやねーしー。」

医者「まず、えーと、何て言つたかなレントガン撮るぞー！」

看護師「先生ー・レントゲンですー！」

瑞稀「大丈夫か?」この医者。」

瑞稀はレントゲンを撮る為移動した。

空龍は着いてきてはいけないと言われ廊下のベンチに座っていた。

瑞稀「頭のレントゲンか・・・。頭蓋骨が[与]るのか?」

ビー パシャツ!

瑞稀「ピーって何だ? ピーって・・・

医者「次は手だ。」

瑞稀「アイアイサー。」

ビー パシャツ!

瑞稀「さー終わつた、終わつた。」

そして、空龍も加わり、再び診察室へ。

空龍「どうだつたんだ?!」

瑞稀「ピーって言つてた。」

空龍「ピー?」

瑞稀「レントゲンがピーつてね。」

空龍「いや、結果だ、結果!」

瑞稀「これから言われんだろう?」

空龍「そ、そうか。」

医者「・・・骨折。」

空＆瑞「「え?..」」

医者「頭蓋骨、右手の甲、共に骨折です。」

瑞稀「なんだとおー?」

空龍「・・・じつじよ。」

瑞稀「何がだ?」

空龍「男っぽいとはいえ、女に怪我をさせてしまった。」

瑞稀「・・・気にするな。」

医者「ギブスをはめる、那儿のベッドに横たわれ。」

瑞稀「はいはい。」

瑞稀はベッドに横たわった。

医者は頭、手にギブスをつける。

第十章 瑞稀の嘘

第十章) 瑞稀の嘘 (

瑞稀「うわー、かつこ連。」

空龍「…………」

瑞稀「…………氣にするなって。」

空龍「…………」

そして廊下に出る。すると、聖純と出雲がいた。

聖純「瑞稀ー、どうしたんですか?ー、その包帯ーー、空龍にやらされたんですか?ー!」

瑞稀「いや、片付けしてただけどさあ。」

ボール踏みづけて派手にこけて、暖炉にぶつかった

空龍「…………」

出雲「何で空龍は黙つてゐるの?」

聖純「瑞稀嘘ついてません?」

出雲「ボクは瑞稀を傷つける奴と一緒にいたくないよ。」

瑞稀「何で決めつけるんだよ。」

空龍「…………」

聖純「だつて、さつきから空龍喋つてないじゃないですかー。」

瑞稀「それだけで決めつけるなよー。」

出雲「だつて、今日初めて会つたし、

本当は伝説利用してるボクらの敵かもしけないじゃんか！」

瑞稀「…………何で人を信じないかねえ。こいつ等は。」

聖純「瑞稀が怪我してるんですよ？こけただけじゃそんな怪我はしませんよー。」

瑞稀「ボール踏んづけたんだって。」

出雲「じゃあ何で空龍が黙るんだよー。」

瑞稀「心配してくれてんだろ？」

聖純「……納得はできません……とにかく結果はどうだったんですか？！」

瑞稀「別に、ただ血が出ただけ。空龍がさあ、大げさんなんだよー。暖炉にぶつかって怪我したくらいで病院行くわ、

医者は医者でいきなりレントゲン撮るし……」

空龍「悪かったな、大げさで。」

瑞稀「本当、大迷惑だ。病院行くまではいいけど結局指のつき指だけじゃないか！」

聖純・出雲に心配かけないよう必死な瑞稀を見て空龍は赤くなる。
空龍「…………。」

瑞稀「何故そこで赤くなるー！」

聖&出「…………。」

聖純「お医者さん。診察結果くれません？」

瑞稀「聖純～、人のプライバシーを……。（ヤバイ、限りなくヤバイ！ー！）」

聖純「一応結果は知つとかないと。」

瑞稀「俺は一応女だぞ？コノヤロー。」

出雲「そうだつけ？」

ガイーン！

瑞稀「今日この展開2回目だあ。」

空龍「瑞稀、金。」

瑞稀「ああ、診察料ね。」

看護師「入院は？」

瑞稀「する必要ないだろ。つき指だけで。（余計な事は言つない。）

「

看護師「医者が一応頭をぶつけたんで安静にと言つてたのですが…。
・」

瑞稀「ああ、家で安静にしますよ。」

聖純「診察料はいくらですか?」

聖純は財布を持って払おうとしていた。

瑞稀「ああ、軍に請求しといて。レントゲン高いだろ?えーと、軍の大将に…。」

聖純「た、確かにお金一万円もありませんでした…。」

出雲「野菜買わなければ。」

聖純「野菜は必要ですよ。」

瑞稀「今田は何なんだ?」

出雲「焼肉だよ…。」

瑞稀「空龍。お前、大丈夫だよな。肉と野菜。」

空龍「あ、ああ!大好物だぜ!オレには好き嫌いはない!」

瑞稀「良し!それでこそ男だ!出雲!頑張れ!」

出雲「う」・・・。

聖純「では帰りますか。」

瑞稀「そうだな。」

そして4人は家に帰るのだった。

瑞稀は骨折の事は話していない。それが空龍のせいだという事も。

それと、空龍が自分を責めないように・・・

第十一章 空龍の一田惚れ

第十一章) 空龍の一田惚れ

瑞稀「飯だーーー。」

聖純「出雲、鉄板出して貰うださーい。」

出雲「これで良いって?」

聖純「良いですよ。では、焼きますか。」

瑞稀「・・・空龍は?」

聖純「やあ。」

瑞稀「聖純怒つてる?」

聖純「そりゃあ怒りますよ。空龍のせこじやなことはこえ瑞稀に怪我させるなんじ。」

瑞稀「いや、俺勢い良かつたからなあ。暖炉に突っ込んでいったもん。仕方ないさ。」

出雲「見てみたかったなあ。」

瑞稀「何だそれ。まあ良いや、空龍探ししてくるから先焼いててよ。でも、验つなよ。」

そう言い残して瑞稀はソビングを出る。

家中を歩き回っていると、暖炉の所に空龍がいた。

血を拭いているようだ。

瑞稀「何やつてんだ？」

空龍「うわっ！びびった。・・・血を拭いてんだよ。」

瑞稀「別に田立たないから良いのに。」

空龍「・・・めんな。」

瑞稀「大丈夫だ。」

空龍「嘘、ついて良かったのか？」

瑞稀「あいつ等、凄えおせつかいだから良いいんだ。」

空龍「・・・」

瑞稀「あまり、黙つてるとあいつ等以外と鋭いから怪しまれるぞ？」

空龍「あいつ等、あいつ等つて詳しいんだな。・・・好き、なのが

？」

瑞稀「んな訳ねえだろ、2人共女っぽいし。

こん中で一番男っぽいの俺つて言われてんだぞ。」

空龍「男っぽいのが好みなのか？」

瑞稀「俺よりも、な。」

空龍「なあ、一目惚れって信じるか？」

瑞稀「さあ、俺は一目惚れ何かした事ねえからな。」

空龍「…そ。」

瑞稀「それがどうかしたか？」

空龍「いや、なんでもない。」

空龍は少し赤くなっていた。

瑞稀「何だ？俺が好きか？」

空龍「なつ／＼＼＼！」

空龍は更に赤くなつた。

瑞稀「え？マジ？図星？」

空龍「な、なつ！＼＼＼＼＼＼＼！」

瑞稀「お前も変な趣味だな。」

空龍「・・・悪かつたな。」

瑞稀「でも俺、お前の事嫌いじゃないぞ?」「

空龍「え?マジかよ~~~~~!」

瑞稀「お顔が真っ赤ですよ。空龍ちゃん。」

空龍

瑞稀「さてと、焼肉喰いに行くつー・・・」

瑞稀の言葉を遮るものがあった。

それは、空龍の歴史だった。

だが、2・3秒で離れた。

瑞稀「ひーーー！」

空龍「…………」

空龍は走つていってしまった。顔を真っ赤にして。
瑞稀「……なつ何なんだよ、あいつ。」

その後、瑞稀はリビングに行つた。

聖純「びうしたんですか？」瑞稀。

出雲「空龍もうう来てゐるよ。」

瑞稀「別に何でもなこと。…………それ一喰うかー。」

聖純「瑞稀、顔が赤いですよ？」

瑞稀「この部屋が暑いんだ。」

出雲「焼肉焼いてるからね。」

空龍「そりあ、喰うだーー！」

瑞稀「……あー俺右手使えねえんじやんー。」

空龍「瑞稀の分も喰つてやるから安心しな。」

瑞稀「あつひでーーー！左手でも喰えるー空龍よつもかく喰つてやる
ー！」

空龍「負けねえぞー！」

出雲「ボクも負けなこよー！」

聖純「じいでも喰こですけど肉焦げますよ。」

出雲「凄いー！瑞稀野菜をたつぱつ食べてるー！」

瑞稀「野菜は良こー。出雲も食べべるー！」

出雲「ボクもー！」

空龍「早く喰わねえと無くなるぞー！」

瑞稀「あつてめえー！」

「つして楽しにタ飯は終わった。

第十一章 名付け

第十一章～名付け～

瑞稀「ああ～、今日といつ一日は長かった。」

出雲「何こいつてんのさ、瑞稀。」

瑞稀「いや、だつて色々ありますせただろう今日は。」

聖純「そりですね。僕らが出雲ひ田田ひだつて言いますし。仲間は増えますし。」

瑞稀には怪我をしますし…。大変な一日でした。」

瑞稀「風呂入つてくる。やしたら、すぐ寝る。」

と、瑞稀はリビングを後にした。

聖純「布団でも敷きますか。」

聖純「ああ、どうしまじょうね。」

出雲「ねえ、うちつて布団三枚しかないよね。空龍どうするの？」

空龍「なんだよ、その投げやりな態度は。」

聖純「別に床で寝てれば良いんですよ。」

出雲「でも少し痛そうだからせめて、マットの上のまづが良いくんじ

やない？」

聖純「出雲は優しいですね。では、マットの上にこいつだ。」

空龍「なつ…まあ良いけどよ。」

その頃瑞稀は…。

瑞稀「…いつでー。つーか、かなりの量の包帯巻いてくれたんだな。」

包帯を取っていた。ギプスも一日はずした。

瑞稀「…左手で頑張るか。」

などとぼやきながら左手で髪を洗つたり、体を洗つたり…。

瑞稀「よし、あがるか。」

風呂をあがった瑞稀はリビングへと向った。

包帯などいやや時間がかかつたが。

瑞稀「次どーぞ。」

出雲「じゃあ僕入る。」

聖純「大丈夫ですか？瑞稀。」

瑞稀「ん？何が？…ああ怪我か。大したこと無いよ。んじや、
おやすみ。」

聖純「おやすみなさい。」

出雲「おやすみ！」

瑞稀「ん、おやすみ。・・・ついで出雲風呂の早いだる。」

出雲「そんなこと無いよ。今は空龍が入ってるよ。」

瑞稀「・・まあいいや。今日は疲れた。おやすみ。」

聖純「無理しないでくださいね。」

瑞稀「分かってるよ。」

瑞稀はそう言い残して寝室へ向った。

瑞稀「何か…。疲れたけど…。疲れそうにねーや。」

そう言って瑞稀は先ほど作った剣と刀を見、1本の刀を持ち上げた。

それは瑞稀が初めて作った刀だ。

柄が紅色をしていて、龍を模つた刀だ。

瑞稀「緋色の龍。『**緋龍**』」

瑞稀は刀に名をつけた。

次に2本目の刀を取り出す。

その剣は柄は灰色と赤。赤は炎の赤。灰色はその赤が暴走しないようだ。

そんな願いを託した色。

そして、鼠のように舞う炎を模つた。

瑞稀「鼠の炎。『**鼠炎**』」

三本目。

瑞稀にとつては宝のよつな剣。

昔使つてた。家族がくれたたつた一つの剣。それを空龍に直してもらつたもの。

家族代々受け継いできたものなのだ。

「炎帝」^{えんてい} 炎の神。炎の帝。

これを授かつたものが神となる。

瑞稀は神の事までは知らなかつたが、大切な物だと聞いたもの。

柄は炎。いや、もつと大きなもの。火炎を模つていてる。

瑞稀はこうした話をつぶやく。。

瑞稀「『^{けい}螢』」

瑞稀は螢を持って外に行こうとした。

あれから随分時間も経ったし。2人共もう爆睡する時間だったから

最終章 最後の夜・最後の朝

第十三章～最後の夜・最後の朝～

瑞稀「ふう。涼しい。」

空龍「何言つてんだよ。まだ用だから当たり前だろ。」

瑞稀「あっ・・・。空龍じやんか。何してんだよ。」

空龍「あの2人、俺に寝る場所くれねーから。」

瑞稀「あつそつか。俺のベット使つても良いよ。」

空龍「お前は?」

瑞稀「俺は貰出しね。明日から旅行たいからね。」

空龍「この時間にか?」

瑞稀「うん。売つてるよ。『風封刃』なら。」

空龍「送つてべ。」

瑞稀「良いよ。どうせ、歩くから。」

空龍「俺は風の神だぞ?」

瑞稀「・・・神?」

空龍「知らなかつたのか？風の本持つてゐつて書つたじやねえか。」

瑞稀「本と神つて一緒になの？」

空龍「ああ、本に選ばれて、所持してゐる奴がその属性の神。」

瑞稀「……じゃあ、俺は炎の神？もしかして『炎帝』？」

空龍「ああ。そうなるな。」

瑞稀「俺が炎帝か。じゃあ、本が真つ白なのって呪文でも書いてあるのか？」

空龍「そつだ。自分が神だと自覚して、それをじつかりと意思を持つと呪文が読める。」

瑞稀「へえ。帰つたら見てみるか。」

空龍「呪文は、俺はまだ5個くらいいだけ。」

心の強さ・体力・智力・自覚などによって数が変わる。
あと経験で増えしていく。」

瑞稀「俺、何個だろ。まだ見えないかもな。」

空龍「じゃあ、行くぞ。f1.i going.」

空龍が何かを唱えた。

すると、風封刃についた。

瑞稀「スゲエ。じゃあ、大量に買つても平氣だな。」

空龍「ああ、多分。」

瑞稀は物を物色し始めた。そして、レジへ向つた。

店長（女）さんが言つた。

店長「あれ？ 瑞稀君じゃない。また囮つたわね。今の時間のタイムサービス。」

瑞稀「この時間が一番やすいですからね。」

店長「まつたく。まあ良いわ。」

かなりの量だけどタダ。こんな量買つて事は、旅に
出るのね。」

瑞稀「はい。出来れば明日。遅くとも一週間後にね。」

店長「悲しいわね。瑞稀君が居なくなるのは。」

瑞稀「大丈夫ですよ。」

瑞稀は微笑んで店長さんを見た。

店長「旅中でも欲しい物があつたら何でも言ってね。はい、電話番号。

すぐに振り込んであげるわ。」

瑞稀「有難うござります。とても、助かります。では。」

店長も微笑んでバイバイと手を振った。

そして、瑞稀と空龍は店を後にして大量の荷物を持って空龍の術で家に着いた。

瑞稀「あーあ。もう4時じゃないか。」

空龍「そうだな。」

瑞稀「少し寝なよ。俺は火の本を見てくる。」

空龍「……なあ、一緒に寝ないか?」

瑞稀「……はあ?俺は眠くない。勝手に寝て。」

空龍「……なら良い。」

瑞稀は本を取つて何処かに行ってしまった。

瑞稀「何なんだ、あいつは。」

さて、と、本を開く。

瑞稀「あつ・・・。」

呪文が書いてあった。呪文は英語だった。

見たところ、6個あった。

瑞稀「空龍に勝つた。」

微笑んだ。

そして、本に触れていたら不意に、思い出した。父さんのこと。

涙が出そうになつたけど堪えた。

何故思い出したのかは分からぬけど。

乗り越えてきた辛い事、楽しかったこと、うれしかった事、悲しかったこと。

それが心の強さかな?と思つた。

そしたらまた、呪文が増えた。

7個。7個の術。

【Fire】【Flame】【Shimmer】【heat
】【invitation to freedom】【Fire
ry zeal】【antipyretic】

7個。

そして、朝になる。朝食を作る。

聖純「あれ? 瑞稀? !」

瑞稀「何だよ。」

聖純「珍しいですね。瑞稀が早起きするなんて。」

瑞稀「だって、今日旅でるんだもんな。」

聖純「今日ですかーー。」

瑞稀「うん。」

聖純「支度はすぐ出来ますナビね。・・・まあ良いでしょ。」

瑞稀「よしあー。」

聖純「出雲を起こしてきましょ。」

瑞稀「じゃあ空龍起こしてくわよ。」

そういって4人がリビングへと集まった。

瑞稀「今日旅に出ることになりました。」

出雲「ほんとにーーやったあー！」

瑞稀「なので、今がこの家の最後の朝食です。だから、ホットケーキでー！」

出雲「やつた！大好きホットケーキ。」

聖純「祝い物でもないですけどね。」

瑞稀「良いんだよ。田常的で。」

空龍「確かに田常的な朝食だな。」

そうして、出逢って一日を過ぎ。旅へ。

でもまだ、このお話は終わらない。

最終章 最後の夜・最後の朝（後書き）

最終話ではあります、まだおわりません。
まだ、続きを書きたいと思います！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7045a/>

bond of flame ~炎の絆~

2010年12月31日06時41分発行